親が子育てを楽しむための子育て支援活動(2)
―親子が楽しさを共有する活動実践を手がかりに―

小　島　千恵子

1．はじめに

本研究は、第31号の紀要で発表した研究の継続研究である。今日、「育児は大変である」という認識が深まり、母親の育児負担の軽減が積極的に考えられるようになった。「子育て支援」という言葉も当たり前に使われるようになり、地域社会では、「つどいの広場」の実施にみるように、入園する前の子どもを持つ母親が気軽に集える場所の提供が増えた。親子の居場所づくりが始まってから20余年の間に、社会はとても子育てがしやすい環境になったと言えよう。また、待機児童の問題は解決されないものの、親支援は保育園や幼稚園に入園してからも、積極的に行われている。それに比べ、就学後の親あるいは、親子が気軽に集える場所の提供は少ない。児童館活動や放課後子どもプランのように、子どもが放課後過ごす場所の提供はあるが、親が子育ての相談をしたり、悩みを話したりする場所はほとんどないと言っていいだろう。放課後家庭で過ごすことが困難な子どもについては、学童保育所へ入所し、親が中心となって積極的に親子活動を行っているところもあるが、子どもの活動が中心で、親は子どもを預けるだけというものが多い。

子育て支援がめざすものは、子育てによる孤独感や閉塞感を開放して、育児不安などから起こる様々な問題を予防することにある。児童虐待などは重大な社会問題であり、「子育て支援」という言葉が誕生してからもなお減少していない。児童虐待は、乳幼児に多く報告されているが、入学後も継続しているケースも少なくない。子どもの年齢が上がってからの虐待は、発見しにくく複雑なものが多いため、子どもへのフォローや親対応も難しい。このようなことからも、小学校入学後もしばらくは、親が気軽に子どものことで相談ができたり、親子が共に参加し、一緒に遊んだりして過ごすことのできる場所が必要であると考える。

親は、子どもが入学すると、幼稚園や保育園への送迎も必要なくなり、子どもから距離をおいてつきあうことが多くなる。しっかり愛着形成されていて、「親離れ」、「子離れ」という自然な形で距離が取れるようになることが望ましいが、愛着形成されないままに子どもが成長し、思春期、成人期になって、親と子どもが適切な距離が持てず、親子関係がうまくいかないということはよく聞かれる話である。親との愛着の発達は、子どもの人間関係の基本になることは、ボウルビィのアタッチメント理論でもよく知られている（1964）。アタッチメントは乳幼児期に限定されたものではなく、大人になっても認められるという（ボウルビィ 1993）。この考え方からも、子育て支援活動は、入学後も必要であり、子どもが思春期を迎える頃を見据えての子育て支援を考えていく必要があるだろう。

子どもが生活する中で出会う様々な人たちと関係性を築き、社会の中で自立していくことが望ましく、それが世代間でリサイクルされるように支援したいものである。その基盤となるのは、親が子どもと向き合い、子どもと適切な距離を保ちながら自信を持って子育てしていくことではないだろうかと考える。しかし、親が抱える様々な問題が原因で、基盤となる親子関係が崩れてしまうことがあり、親自身の力だけでは修復できないことも多いようである。子どもが多感な時期には、親が自ら、精神的なゆとりをつくり、自信をもってゆったりと子どもと向き合うことが必要であると考える。そのためには、親と子どもが同じ「空間」で、同じ「時間」を過ごし、いろいろな「仲間」と遊びながら楽しさを共有して、共通の話題で会話することできれば、親子の関係性が深まり、親の生活も子どもの生活も豊かになるだろうと考えた。「三間」といわれるものを親子関係においても成立させることが必要であろう。そこで本研究では、このような子育て支援活動の実践の具体的な方法について、現在筆者が地域で取り組んでい

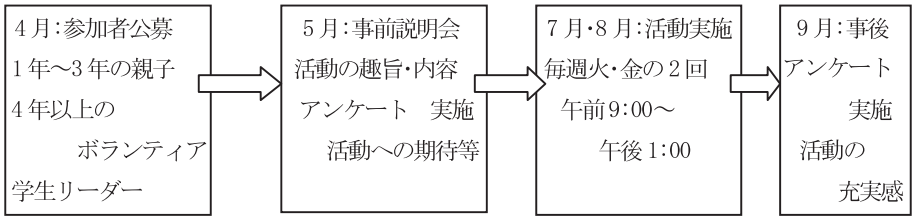

Fig. 1　実践の流れと活動内容

る、小学1年生から3年生までの親子広場の活動をとおして検討していきたいと考えた。

2．研究方法

実践・調査対象者は、A県T市内の小学校1年生〜3年生の親子60組。

実践調査期間は2008年・2009年・2010年の夏休み。

実践・調査手続きは、Fig.1に示すとおりである。対象者は年ごとの公募であるが、半数はリピーターである。

2009年度には、1月に餅つきと4月上旬にハイキングを行った。夏休みの広場は、社会福祉法人T市社会福祉協議会（以下社協）の主催で行っているが、1月・4月の活動については、社協で事業として予算化されていないため、実行委員主催の任意活動でおこなった。

親へのアンケート調査の項目については、次のとおりである。活動前：活動に期待することは何ですか。活動後：楽しかった活動は何ですか。活動をとおして親子関係に何か変化はありましたか。

3．内容と考察

（1）活動の考え方と活動開始の経緯

この活動の開始は、2006年6月、小学校に入学させて初めての夏休みに子どもを預ける場所に困った母親からの相談を筆者が受けたことにある。筆者は当時、T市の総合ボランティアセンターでボランティアコーディネーターをしていた。相談者は、若者のボランティアに有償でもいいので、母親が仕事に行っている半日間、留守番している子どもの遊び相手になってほしいというものであった。

夏休みを迎える直前にいろいろな機関に相談したがすべて断られ、困った末の筆者への相談であったようである。

相談にした機関は、放課後児童クラブとファミリーサポートセンターである。放課後児童クラブでは、年度途中の一時契約は認められないこと、定員満員であることが「お断り」の理由であった。ファミリーサポートセンターについては、会員登録し、援助会員になって契約をすれば子どもを預けることができるが、この場合、知らない家庭に親が困って子どもの預け場所を求めたということにすぎず、一緒に遊ぶ友だちがいれば別であるが、子どもにとって有意義ではなくなり、逆に負担と考えたとのことであった。

市内には、児童センターがあり、小学生以上は、親同伴でなくても午前9時〜午後6時まで遊ぶことができる。児童センターの利用者の中には、母親が仕事に出かける前に、センターに送り、仕事が済むと迎えに来るというように、母親がセンターを託児所替わりに利用するというケースもある。もちろん児童センターには託児するという機能はないため、このようなケースについては、保護者に理解を求めているところが多い。相談者もこの方法を考えたようであるが、低学年のため子どもだけで遊ばせておくことは、難しいと考えたとのことであった。中には、母親の言いつけをしっかり守って、コンビニエンスストアで昼食のおにぎりを買って食べ、迎えがあるまで遊んでいる子どももいるが、低学年の子どもは、遊び始めて1時間もすると、退屈になり、「お母さんを呼んでほしい」と児童厚生員に言ってくることが多い。

小学校入学前までは、親が仕事を持っていれば、常勤、短時間労働に関係なく、申し込みをすれば、保育園に子どもを預けて安心して働くこと

ができる。しかし、小学校へ入学した途端その状況は一変する。常勤で働く母親は、常勤という理由で、入学前から、放課後児童クラブへの入所など、子どもの生活の仕方を考え、準備することができる。一方短時間労働をしている母親は、入学後の短縮授業期間や、夏休みのような長期休暇の間は、仕事を一度辞めるか、その間については仕事を休むという選択をせざるを得ない。このように、同じように働いているのにも関わらず、歴然とした「差」が出てくるのはなぜだろうか。このことは筆者が保育園勤務や児童センター勤務時代にも目の当たりにしてきたことである。学童保育のはじまりは、まさしく子どもを預ける場所に困った親たちの草の根的な活動によるものである。学童保育所も数が足らず、筆者が今回関わったケースと同様のことが常に起こり、困った親が自力で学童保育所を立ち上げるということが繰り返されてきた。親同士の話し合いがうまくいかなかったり、運営が厳しいため、子どもと一緒に生活する指導員への報酬も少なく、その要員を探すのも困難であったりするようだ。報酬が少なく指導員の生活を保障できない現状があるため、学童保育に思い入れがある指導員がいたとしても、指導員に専念することは難しく、人材の減少を引き起こしているようである。

国はこのような現状を受けて、総合的な子どもの放課後対策として2006年、「放課後子どもプラン」を創設した。2007年から、文部科学省が管轄する「放課後子ども教室推進事業」と厚生労働省が管轄する「放課後児童クラブ事業（学童保育事業）」の実施要綱や補助金交付要綱が決められ、事業がスタートしている。学校を開放し、そこに指導員を配置して、放課後の子どもの生活の保障が始まったものの利用していないという声も少なくない。

子どもの生活の安全保障はもちろんのことであるが、安全保障だけではなく、子どもにとって豊かな生活を保障するという視点を忘れてはならないと考える。子どもにとって豊かな生活とは、「いろいろな経験」「豊かな人間関係」「地域とのつながり」であると考える。その基盤となるのが、家族のつながりであり、親と子どもの関係であると考え、この視点を中心にして活動の企画を立てることとした。

現代社会は家族が個人化したと言われる。山田（2004）は、質的に異なった 2 つの家族の「個人化」を区別することが重要であると論じ、その中で家族の本質的個人化として、「家族であること」を選択する自由、「家族であることを」解消する自由を含んでいる。親子でいえば、子どもが親を選んだり、親が子どもを選んだり、親子関係を解消するという選択肢が用意され、その選択が個人の意思に委ねられているという例をあげ、家族の本質的個人化は家族のリスクにつながることを示唆している。

人間は人間同士の愛着関係の中で成長していくものである。家族の個人化が進めば、愛着など意味のないものになってしまうのではないかと考える。これらのことからも、親子で活動に参加し、共通の話題を持つことは、その親子や家族のあり方によい影響を与えることになるのではないかと考えた。

福祉現場では、家庭の様々な状況において、支援の方法が分けて考えられているが、家庭のいろいろな事情を加味しながらも、子ども側から考えると、子どもが一緒に集ったり、遊んだりすることは、いろいろな事情に左右されことなく、その居場所が確保されなければならないと考えた。筆者は、この考えを相談者に伝え、親の賛同者かつ、手伝いの申し出があれば、親子活動として開始し、その中で、働いている親の参加の仕方などを考えていくこととした。子どもを預ける場所がないということが主訴であったが、目的や趣旨を明確にし、明文化することで、参加者意識も向上できると考え、活動の趣旨や方針について説明した上で、参加者を募ることとした。

（2）活動の趣旨

「託児ではない親子共有の自由な活動場所」であり、地域、学校、学年に関係なく、ひとつの場所での出会いをきっかけに、一緒に遊んだり、運動したり、ものづくりをしたり、おしゃべりをしたりしながら、自由に集える親子の空間づくりをめざすこととした。地域で暮らす親子がいろいろな人と出会い、知り合いになって、心と心をふれ合わせ、つながっていくことの温かさ、大切さをこ

の広場でできるようにしていくことを考えた。親子で一緒に参加して、いろいろな活動を共に体験することは、親子で共通の話題を持つことになる。話題の共有は、親子で楽しく会話する機会の増加を促すことにもつながる。このことで、親子の関係を密にさせ、関係性の深まりにもつながっていくことになると考えた。また、高学年以上の希望者には、ボランティアとして継続的に参加してもらい、この活動が世代間でリサイクルされていくことを考えた。

文部科学省が管轄する「放課後子ども教室推進事業」と厚生労働省が管轄する「放課後児童クラブ事業（学童保育事業）」（2007）は、放課後の子どもの安全で健やかな居場所を確保、勉強やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の取り組みの充実を掲げている。そこの中に、「学びの場」「体験の場」「交流の場」「遊びの場」「生活の場」という視点で活動目標を立てている。また、大学生や地域のボランティアや高齢者、中高生といった地域の人たちとの力も借りて、この間をつなぐコーディネーターが、活動や交流の調整を行うということになっている。

本研究の取り組みもこのプランと大差はないが、この活動は、放課後の子どもが対象であり親子活動ではない。子どもの居場所を地域の中につくり、地域で子どもを育てることは、子どもにとっても、子どもを支える地域の人々にとっても大変有意義で、人間として豊かに成長していく生涯の過程としては、有効であると推測される。

しかし今、親子と地域の人たちとの交流については、地域によって格差が大きく、地域とのつながりは、全くない、ほとんどないという家庭も多い。乳幼児対象の子育て支援活動では、親子で老人ホームや施設などを意図的に訪問して交流したり、活動の企画の中で老人を招いたりすることはあるが、小学校に入学すると、親子で地域行事に参加するということが少なくなることが推察される。地域の運動会やお祭りの行事についても、先に述べた、家族の「個人化」の中で例にも出されているが、父親は、義務感で地域の行事に参加するものの、他の家族はそれぞれに過ごすというようなケースは少なくないだろう。

地域の中で「居場所」という言葉をよく使う。筆者も児童センター勤務時代には、センターを地域の人たちの「たまり場」と称し、世代を越えた様々な交流事業を展開してきた。

住田ら（1999）によると、この「居場所」という用語は、不登校児童の増加と関係が深く、教育の現場でよく使用されるようになったという。今、居場所がない人たちが街にはあふれている。「ホームレス中学生」でも有名になったほど、ホームレスという言葉は一般化した。また、インターネットカフェ難民と言われる若者の増加など、安定した自分の決まった「居場所」のない人たちが、低年齢化していることは社会問題と言えよう。安齋（2003）は、「居場所」に内在する二つの方向性について次のように述べている。「一つは、自分の自己の修正をし、自立していく場としての「居場所」であり、その先には、いきいきと自己発揮することが予測されている前向きな「居場所」である。もう一つは、逃げ場としての「居場所」であり、居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場としての「居場所」である。安齋は、これを「自己発揮の場が前向きとすれば、後者は、後ろ向きな「居場所」と捉えることができる」と述べている。

先に触れた、若者のホームレスやカフェ難民は、後者にあてはまるのではないかと思われる。このことについては、考えねばならない問題がたくさんあるが、思春期を見据えて子育ての支援を考えた時、この両者の「居場所」は大変重要な役割を果たすものと考える。親にも子どもにもこの両者が必要であり、できれば同じ「居場所」に二つの機能を兼ね備えたものがあると素晴らしいことだと考える。

安齋は、逃げ場としての「居場所」と自己発揮の場としての「居場所」も必要なのである。この両者が別に機能するのではなく、その間には密接な関係があって、行き来できる柔軟性とゆとりも「居場所」として必要ではないか。逃げ場としての「居場所」を基盤にしつつも次の新たな「居場所」を子ども自身がつくっていくことが大切であり、その行き来は、大人や仲間との関係性に支えられることによって可能となるだろうとつけ加えている。

本研究の活動の場は、親にとっても、子どもに

とってもこの活動を支えるボランティアにとっても、逃げ場でもあり、自己発揮もできる「居場所」になることを願っている。この場で、はじめて参加した人も、継続参加の人も、参加者全員が大切な存在とされることをめざしている。みんなが「ほっ」とでき、いろいろのかかわりの中から、活力を見出すことができる活動の場づくりをめざし、その実践的な内容を検討したいと考える。

（3）活動の内容と目的

親の賛同や役割分担もでき、2006年度、2007年度は任意の活動として、夏休みの毎週金曜日、週１日を活動日とした。参加対象者は、市内の小学校に通う１年～３年とした。

この対象年齢の設定は、この活動を開始した時、小学校１年～３年の居場所がないという実態と、母親のニーズから設定した。４年生以上は、学校の部活動や地域で行われている教室など所属できるところが多い。しかし、この年齢の子ども達はまだまだ親の細かな見守りが必要であり、特に夏休みという長期休暇は、親も子どもと毎日どのように向き合ったらいいのかわからないなど、悩みを持つ親も少なくない。

幼稚園、保育園時代は、身近に保育者がいて、気軽に子育て相談ができたが、小学校へ入学した途端に、学校の先生は遠い存在になってしまうことなど、親も子どもも幼稚園、保育園から小学校への移行の不安が大きいということが、参加する母親の話から聴き取ることができたため、親のニーズを基に参加対象年齢を設定した。

活動場所は、地元企業の好意で、その企業が経営する市民向けの展示館のホールを無料で借りることができた。必要な経費は、毎回かかった費用を参加者が負担する方法を取った。2008年からは、Ｔ市社協の事業として、赤い羽根共同募金から支援を受けて活動ができるようになったため、市内全域に参加者を公募できるようになった。事務局は社協が務め、活動の企画運営は、母親、ボランティア、学生の趣旨賛同者が実行委員を立ち上げて行っている。活動日は、夏休み期間の毎週火曜日と金曜日の午前９時30分から13時とした。場所は、市内体育館２か所と公民館、市営プールなど、市内の公共の場を社協が借り上げて使用している。

５年目を迎えた現在は、社協の市内広報誌で公募して、申し込みのあった親子から、およそ60組の親子を抽選で決定している。社協が事務局をはじめた当初は、電話での先着順であったが、受付開始と同時に定員となってしまうことは、公平性に欠けるとの指摘から、抽選という方法を取ることとした。

口コミで広がったこの活動を毎年楽しみにしている親子も増えた。また、いくつかの大学の協力を得て学生参加も多くなっている。開催年数が重なるうちに、参加対象者の兄弟姉妹の参加の希望が出てきたため、兄姉は、スタッフボランティアとして、弟妹は親が同伴で参加を認めるようにした。親は、全回数の内で、可能な範囲で必ず１回以上は参加することを約束にしてスタートした。毎年家族そろって参加する人が多くなった。上の子どもが参加すると、下の子どもも行きたがり、気がつくと夏休み全出席という親子も増えている。最終日のイベントを楽しみにしていて、手伝いを申し出てくれる父親もある。両親が常勤で仕事を持っていても、他と同じ条件としたので、必ず１回は参加しているが、子どもの要望もあり、他の日は祖父母が親に変わって参加するという姿も見られる。これらの条件や活動の趣旨については、公募後説明会を開催している。この説明会に参加することも参加の条件としているため、親が参加することに不平不満はない。むしろ子どもと一緒に参加することを楽しんでいる親が多い。

2010年度は、学生が中心となって広場の運営をおこなった。毎年参加している学生が核となり、組織をFig. 2のようにつくって活動を進めた。

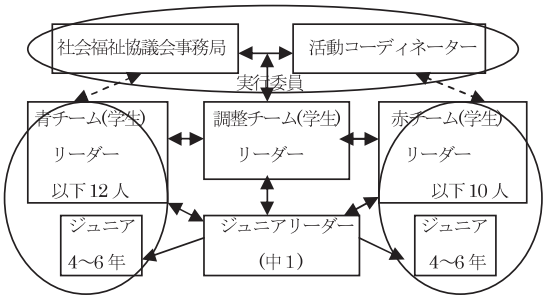

Fig. 2　2010年度の活動組織図

参加した子どもとボランティア学生を２チームに分けて、行動を共にする生活チームとした。遊びの場では、このチームにこだわらず、いろいろなチーム分けにして、いろいろな人とかかわれるようにした。学生の実行委員は、どちらのチームにも所属せず、全体を見通して２チームのパイプ役になって調整役として動けるようにした。子どものボランティアは、ジュニアとしてそれぞれのチームに入り、そのまとめ役をジュニアリーダーとして、調整チームからの指示を受けてジュニアに伝達し、ジュニアの活動が円滑にいくようにした。

前年度までは、コーディネーターが中心となって活動し、社協の事務局がそれを補完する形態であった。４年が経過し、学生やジュニアの参加が安定してきたため、この活動の目的でもあるジュニアリーダー育成の軸をつくり、子ども社会のつながりをつくった。狭い範囲ではあるが、異年齢の子どもが互いに刺激を受けて成長していく縦の社会を形成することを考えた。参加対象である１年～３年は、小学校高学年の子どもに、高学年の子どもはジュニアリーダーから、それぞれ刺激を受け、ジュニアリーダーは大学生に憧れ、大学生は母親及び社会人から学ぶという構図を作成した。

この活動を任意グループで開始した時、１年生だった子どもは、現在５年生になった。学校の部活動もあり、参加回数は少ないが、複数の子どもが今でも顔を見せる。最年長は、中学１年生である。この中学生も参加当初は５年生であった。中学生になった現在もボランティアとして参加し、小学生のボランティアを取りまとめ、大学生とともに、実行委員として活躍している。子どもの縦社会の構図は作成したばかりで実績は得られていないが、高学年の子ども達の動きには変化が見えつつある。また、大学生と母親との交流も生まれ、保育者、教育者をめざす学生にとっては、実習とは違う実践の場での学びになっているようである。

ボランティア学生は、近い将来親になる。自分が親になる前に親の気持ちに触れるという経験ができる。また、客観的に親と子どもの様子を観察し、自分が育ってきた過程と重ね合わせ、自分を育ててくれた親に気持ちを向けることができる。これらのことは、この活動に参加してきた学生が感想として次のように残している。「自分を育ててくれた親に感謝したいとあらためて思った。」「身近で親子に触れあい、子どもを育てることって大変なことだと感じた。」「お母さんたちから知恵をもらった。」「自分も子どもができたらいろいろな人と触れ合えるような活動に参加させたい。」「自分もやんちゃだったんだろうな。おふくろも大変だったよな。」毎回活動終了後、学生の活動反省会をおこなっている。その日の活動をふり返りながら、次回の課題や改善点など確認する。子どもの行動や親子関係など、気づいてことを話しながら、いろいろなことを学んでいることが推察された。学生はチームごとに申し送りノートを自主的につくり、次に参加する同じチームの学生に、連絡などの他に、感じたことを綴っていた。先輩、後輩という学年の縛りはあるものの、学年を越えて同じ活動に参加して、協力し合うことで、学生相互でも学び刺激を受けている様子がうかがえた。大学の履修科目には、演習やケースメソッドなどがあるが、座学だけでなく、共に考えたことを実践する場があることが、学びを実感として受けとめることにつながるのではないだろうか。

（４）活動内容および事前事後のアンケート調査の結果と考察

活動は、夏休み中10回を原則とし、最後にバーベキューや流しそうめん大会をおこなってきた。具体的な活動の内容は、実行委員の母親が意見交換をして、実行委員会で決定した。社協がかかわるようになってからの活動は、Table１～Table３に示すとおりである。

Table１【2008年度】

７／25	オリエンテーション
７／29	パステルアート
８／５	体を使った遊び　（講師）
８／８	英語で遊ぼう　　（講師）
８／12	福祉の日
８／15	学生企画（しっぽとり）
８／19	バーベキュー・流しそうめん
８／22	紙で遊ぼう
８／26	体を使った遊び(2)（講師）
８／29	まとめの会

事後のアンケート調査で、活動の内容評価は、①バーベキュー②体を使って遊ぼう③学生企画であった。

調査の自由記述の中に多かったのは、ルールに縛られない自由な時間に学生と遊べたこと、お昼にみんなでおにぎりを食べたことであった。福祉の日にはアイマスクをしておにぎりを食べてみた（Fig. 3）。

Fig.3　福祉の日　アイマスクをして食事
「おにぎりの味がわからない」

Table 2 【2009年度】

7 ／22	オリエンテーション
7 ／29	パステルアート　　（講師）
8 ／ 4	学生企画（紙合戦）
8 ／ 7	プール遊び・母親料理教室（１）
8 ／11	福祉の日
8 ／14	紙で遊ぼう
8 ／18	学生企画（警泥）
8 ／21	プール遊び・母親料理教室（２）
8 ／25	体を使った遊び　　（講師）
8 ／28	母親企画　（運動会）
8 ／29	バーベキュー・流しそうめん

事後のアンケート調査で、活動の内容評価は、①バーベキュー②紙で遊ぼう③運動会であった。自由記述欄にはたくさんの記述がされていた。母親の料理教室では、マクロビ料理を体験した。母親同士の交流ができてよかったというのが多かった。母親同士のおしゃべりも弾んだ（Fig. 4）。

また、大きな紙に絵を描くということはなかなかできないのでまたやりたいと記述されていた。大きな紙いっぱいに絵を描き、その後その紙を折ったり、ちぎったりして、紙まみれになって遊んだ（Fig. 5）。

Fig.4　母親の料理教室

Fig.5　紙で遊ぼう

Table 3 【2010年度】

7 ／27	オリエンテーション
7 ／30	福祉の日
8 ／ 3	食育セミナー(明治乳業　講師)カレーパーティ
8 ／ 6	学生企画　（猛獣狩り・じゃんけん列車）
8 ／10	学生企画　（魔法のじゅうたん）
8 ／13	体を使って遊ぼう　（講師）
8 ／17	プール遊び・母親のパンづくり教室
8 ／20	学生企画　（人間知恵の輪・なわあそび）
8 ／24	母親企画　（運動会）
8 ／27	チーム発表会
8 ／28	バーベキュー・流しそうめん

Fig.6　参加者の集合写真

活動の事前・事後に親にアンケート調査をおこなった。アンケートは、一部を除き自由記述とした。集計は、回答を同じ項目で分類し割合で表わした。一つの回答に複数の項目があった場合は、すべての項目を抜き出して集計した。2010年については、アンケートを回収中である。

事前の調査内容は、「活動に参加して期待することは何ですか。」に対しての回答は次のとおりである。「親子で活動する場所が欲しかった」という回答が多く、2008年は93%、2009年は86%であった。次に多かったのは、「初めての夏休みをどう過ごしたらいいのかわからなかったから」という回答であり、2008年度は52%、2009年度は46%であった。１年生の親のほとんどがこの回答であった。また、「いろいろな経験がさせたい」が、2008年度は42%、2009年度は34%であった。他には、「子どもに友だちがたくさん欲しかったから」という回答があった。また、少数ではあったが、2008年度、2009年度ともに、「親子で毎日一緒にいるとうんざりするから」「長い夏休みに刺激がほしかった」という回答があった。

事後の調査では、「楽しかった活動の内容は何ですか。」「活動を通して親子に何か変化はありましたか。」（2009年度）に対しての回答はつぎのとおりであった。楽しかった活動の内容は、先にもまとめとして述べてあるが、「バーベキューと流しそうめん」であった。「学生企画」の評判もよかった。また、外部の講師を招いておこなった「運動遊び」も好評であった。全体を通しての感想は、楽しかった。「有意義な夏休みだった」が、2008年度は100%、2009年度は98%であった。

2009年度には、「親子関係や子どもの生活に変化を自覚したか」尋ねたところ、「生活にメリハリができた」が86%であった。「子どもを叱ることが減った」が69%、「共通の話題でよく話すようになった」51%という回答が多かった。

乳幼児期は、保育園に通っていたという子どもが多いためか、入学した初めての夏休みをどのように過ごしたらよいのか戸惑いを持つ親が多いことがわかった。筆者が児童センター勤務時代も毎日、「今日は何をしようかと悩んでしまう」という母親の声を聞いたことがある。特に、第１子の小学校入学は、わからないことばかりで不安が多いことが推察された。この活動開始のきっかけとなった母親からの相談も、「第１子を入学させる」というものであった。母親も子育ての中で、いろいろ経験を重ねながら、自分流の子育ての仕方をみつけ、ベテランの母親になっていくことが理想とされるが、この営みがうまくいかず、育児不安で悩む母親が多いことは言うまでもない。育児不安は、乳幼児の子どもを持つ母親に多いという印象があるが、子育ての期間は、乳幼児以降も続く。子どもを育てている間は、いつも悩みだらけであると、子育てを終えた筆者自身も実感としてふり返ることができる。乳幼児は、低年齢ということもあり、養護面が最重視される。手がかかるということで、母親が自分の時間も取れずに、イライラするという育児不安であるが、子どもが学童期、青少年期に入ると、子どもの心が見えず、対応の仕方に悩む、困るという育児不安になる。どちらが大変かと、比べることはできないが、子どもの心が見えない分、親の不安は大きいのではないかと推測される。活動での雑談の中で、小学２年生の子どもの発達や行動について不安になり、担任の先生に相談したら、さらに不安になったと話した母親があった。学校は、学習が中心となる場である。もちろん子どもの健全な育成をめざしていることは当たり前であるが、学習中心で集団の生活をする場である。特別には支援はいらないが、いわゆる「グレイゾーン」の子どもは、学校での様子を見聞きするたびにどうしたらいいのか、わからなくなるという。先生に「長い目で見ていくようにします」と言われても、「うちの子は遅れている」「迷惑をかけている」と思ってしまうと話した。迷惑をかけているから、なおさなければいけないと思うと、叱ることや世話を焼くことが増えてしまい、気持ちも安定せず、子どもとの関係が悪くなるように感じると話した。この発言からも、子どもを育てている、おおよそ思春期を過ぎるまでの間は、子育て（育児）不安はつきものであり、その内容が変化し、子どもの年齢が高くなるほど、不安の内容が複雑で難しくなることが推測される。

不登校やいじめなどが問題になってくる学童期への移行の年代が、丁度この活動の対象児童にあたる。乳幼児期から小学校低学年のこの時期に、

親子の心地のよい適切な距離間を親も子どもも、身につけておく必要があると考える。また、この時期に、親子の関係について立ち止まって考え、新たな成長の時代に入っていくわが子と向き合い、今後の子どもとの付き合い方を模索することが大切であると考えるのである。子育て文化を継承する中で、先人がいう「子離れ」「親離れ」について改めて考えてみると、ただ離れるという単純なことではなく、そこまでに積み上げた親と子どもの関係があることがわかる。また、親子の愛着関係が成長してからの人間関係に影響すると言われるが、そのとおりであることを、この活動をとおして実感しているのである。

地域で親子の支援をする支援者は、親と子どもの今の関係をしっかりと見据えた上で、親と子どもが心地のよい適切な距離間をもって楽しく生活できる支援をしていく技を身につける必要があるだろう。入学と同時に戸惑う親に寄り添うことは、大変重要な子育て支援ではないかと考える。特に夏休みは、親と子どもが向き合ういいチャンスなのかもしれない。このチャンスを活かして、親子が活動を共有し、その中の出来事を共通の話題にして会話を弾ませることが、親が子育てを楽しいと感じ、子どもも家族の温かさを実感できるのではないだろうか。その一助となるような活動に練り上げていきたいと考えるのである。

4．おわりに

紀要第31号で、「子育てを楽しむこと」について、現行の親子参加型の子育て支援活動から検討を加え、日々の生活の中で、「子育ては楽しい」という親が増え、それが、普通の生活の営みとして次世代に受け継がれていくことが、真の少子化対策であり、子育て支援なのではないかと考察を加えた。また、子育て支援の方法についてもその考え方についてモデルに示し提案した。この考え方が活きる子育て支援の具体的方法を導き出すために、筆者が2006年から取り組んでいる地域の活動を実践の場として、実際に親子の活動を展開しながら、具体的な支援の方法について探っていくことにした。

本実践研究は、具体的に取り組み始めて間もないため、研究の途中であり、この活動が親子の関係性にどのくらい寄与するのか実証されているわけではない。今わかっていることは、この活動に参加することが、親も子どもも、支援者もほとんどの参加者が楽しいと評価しているということである。一様に「楽しい」と評価する理由を考えてみると、二つのポイントがあることがわかってきた。一つには活動（遊び）の内容である。親にも子どもにも取り組みやすいものを取り入れることが重要なポイントであろう。現状を見ても、しっぽとりや猛獣狩り、紙をちぎって遊ぶなど、ごく単純な遊びに人気が集まる。わかりやすい遊びであるから、親も子も単純に楽しみ、話題も共通となる。二つめは、かかわる人である。かかわる人の持ち味が活動を盛り上げ、親にも、子どもにも印象に残ったり、その人とかかわって心地のいいことが共有されたりして、これも親子の共通の話題になるということである。

今後は、参加者のほとんどが「楽しい」と評価しているこの活動が、親子関係にどのような影響を及ぼしているのか、親子で共有した活動の内容やかかわる人が醸し出すものについて検討し、それらが、親子の会話につながっているのかなどを視点にして、親が子育てを楽しむ支援活動のあり方や、親子が適切な距離間を持って、心地のよい関係をつくっていくための方策を検討していきたいと考える。

引用文献一覧

安齋智子（2003）　発達No. 96　Vol. 24pp33～37　「居場所」概念の変遷　ミネルヴァ書房
ボウルビィ（1967）　乳幼児の精神衛生（黒田実郎訳）岩崎学術出版社
ボウルビィ（1988）　母と子のアタッチメント―心の安全基地（二木武訳）　医歯薬出版
住田正樹・南博文（2003）子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版
山田昌弘（2004）　家族の個人化　社会学評論第54巻第4号　日本社会学会
全国学童保育連絡協議会（2007）　よくわかる放課後子どもプラン　ぎょうせい

参考文献一覧

広田輝幸編著（2006）　リーディングス日本の教育

と社会第３巻子育て・しつけ　株式会社日本図書センター
庄司順一(2008)　保育の周辺―子どもの発達と心理と環境をめぐる30章　明石書店
塚田みちる(2009)　乳幼児の自己調整の発達過程と親子関係の歴史―親の「こうしないで欲しい」を子どもが聞き入れるようになる過程―　風間書房

【謝辞】
本研究の実践には、鈴木裕子教授、鈴木ゼミの学生の皆さんにご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

【付記】
本稿は、日本保育学会第63回大会にて発表した親子の関係性を深めるための子育て支援活動の実践に関する研究―夏休みの地域支援活動の試みからの検討―（発表論文集P706）を加筆修正したものである。

I work on child care support for a parent to enjoy child care(2)
—Examination from the practice activity that parent and child share pleasure—

Kojima, Chieko*

本研究は、紀要第31号で発表して研究の継続研究である。活動の目的、考え方、趣旨、実際の取り組みの様子を取り上げながら、親が子育てを楽しむための子育て支援活動とは、具体的にどのような活動であることが望ましいのかを検討した。前紀要で、現行の親子参加型子育て支援活動から検討を加え、日々の生活の中で、「子育ては楽しい」という親が増え、それが普通の生活の営みとして次世代に受け継がれていくことが真の少子化対策であり、子育て支援なのではないかと導き出したことを受け、本研究では、この考えを活かしていける子育て支援活動について、筆者が2006年度から取り組んでいる地域の活動を実践の場として実際に親子の活動を展開しながら具体的に探っていくことにした。毎年、活動後のアンケートで、活動に参加した親子、支援者のほとんどが、「この活動は楽しい」と感想を残している。「楽しい」と評価する理由について整理してみると、二つのポイントがあることがわかった。一つは、活動の内容である。親にも子どもにも取り組みやすい単純な活動（遊び）を取り入れることにより、気軽に楽しみ、話題が共通となって会話が弾むということである。二つめは、この活動にかかわる人である。かかわる人の持ち味が活動を盛り上げ、親にも子どもにも印象に残ることである。また、「かかわって心地のよい人」が親子で共有されると、これも共通の話題になるということである。「子育てを楽しむ」ための子育て支援活動を具体化していくための要素について、本実践研究をとおしてこの２点を導き出すことができた。

キーワード：親子の関係性，楽しい子育て，子育て支援活動，地域，支援者（ボランティア）

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*